

# 『アンチ・オイディプス』の 欲望・社会・人格

—— 自由の中の隷属，隷属の中の自由 ——

吉 澤 保

## はじめに

「人間は自由なものとして生まれたが，至るところで鉄鎖につながれている<sup>1</sup>」。『社会契約論』の有名な一文は，自然の側の自由と社会の側の隷属というルソーの思想を簡潔に表現する。人間を欲望に変えると，『アンチ・オイディプス』（1972年）の思想を要約することになる。欲望は本来自由であるが，至るところで隷属している。ルソーへの参照は『アンチ・オイディプス』自らが行う。「無意識 [つまり欲望] は，自然-人間 [homme-nature] であり，ルソー主義者である。そしてルソーの中にはなんと悪意と術策とがあることか<sup>2</sup>」。本稿が対象とするのは，欲望から社会を経て人格へと至るこのパラドクサルな道筋である。その際，岡本裕一郎の見解を導きの糸とする<sup>3</sup>。

岡本によれば，『アンチ・オイディプス』の欲望は「欠如や否定を一切含まず，まったく肯定的だ」。「プラトン以来，欲望は，「欠如したものを獲得することとして，たえず否定的に理解されてきた」。「そうした「欠如的なものを求める」否定的働きを，ドゥルーズ＝ガタリは「欲求」と呼んで，肯定的な「欲望」から区別した」。しかも，岡本によれば，欲望と欲求とは単に区別されるだけではない。「彼らによれば，肯定的な「欲望」が本源的であって，否定的な「欲求」はそこから派生する。なぜなら，「欲望」は本来肯定的であって，いささかの否定も含まないからである。肯定的な「欲望」に，二次的な否定が

持ち込まれると、「欲求」が生じてくるのだ」。そして「こうした「欲望」原理には、決定的な難点が潜んでいるように思われる」。その問題はこう表現される。「『欲望』が本源的で肯定的であるとすれば、そこからどうして否定的な「欲求」が派生するのであろうか。あるいは、「欲望」は、否定的なものを「欲望」することはないのであろうか」。この問いは、次のように言い換えられている。「『欲望は本質的に革命的である』とすれば、「ひとはなぜ自分の抑制を欲望することができるようになるのか？」つまり、「本源的で革命的な「欲望」が、抑制という否定的で派生的なものを、どうして欲望するのか」。この問いを、「ドゥルーズ＝ガタリは「欲望のパラドックス」と呼んでいる」。そして『アンチ・オイディプス』は、この問いに答えることを目的として書かれた、といっても過言ではない」。

岡本は『アンチ・オイディプス』にこの問いに対する三つの解決策を見いだす。1)「スキゾとパラノ」の二元論、2)「欲望史観」、3)「死の本能」説。岡本はそれぞれの解決策を検討して結論づける。「『アンチ・オイディプス』は、「欲望のパラドックス」を解決するどころか、むしろ、それを放置したまま終わったのではないだろうか」。さらにこの観点から『千のプラトー』（1980年）も取り上げられる。その議論にも満足していないことが分かる<sup>4</sup>。

岡本を参照するのは、ドゥルーズ・ガタリを専門としない岡本の見解——しかもフランス現代思想史の概説書における見解——を批判するためではない。それを導きの糸として『アンチ・オイディプス』の理論的試みを解きほぐすためである。岡本は『アンチ・オイディプス』の問いを正しく捉えている。ただしもっと強調すべきは、『アンチ・オイディプス』全体がこの問いに対する解答であるということだ。この著作は、欲望から的人格化を丹念に記述することを試みる。それはしかしながら、そのパフォーマンスな仕掛けも相まって、十分に読み解かれているとは言い難い。さらに本稿が試みるのは、岡本の見解を方向づけるその直観的確さを示すことだ。彼らの哲学の基本的な図式は確かに捉えられている。善なる神を原因とする世界に悪があるのだろうか、世界に悪が実存するなら悪の原因はどこにあるのか。以上の神学上の問題に対

して、ライプニッツは世界の最善説を主張することによって、世界のみならず神をも無罪化する。ヴォルテールの批判を経た後のルソーは、ライプニッツのような形而上学的手練手管に頼ることはできない。個別的悪の存在を認めつつも、いわば修正されたオプティミストとして悪の起源を神にも人間そのものにも帰することはない<sup>5</sup>。二人の欲望も構図はよく似ている。自由から出発した場合、隷属をどのように説明するのか。『アンチ・オイディプス』は曖昧であったが、『千のプラトー』は自由が隷属のいわば傾向を含むという解答をあっさり示す。スキゾを神とする彼らはいわば神義論的悩みに囚われることはない。

## 1. はじめの欲望

『アンチ・オイディプス』が記述を試みるのは、欲望からのオイディプス化である。「ともかくも、ひと〔on〕はオイディプス化される<sup>6</sup>」。オイディプス・コンプレックスは欲望に含まれないが、最終的に人はそれを持つに至る。オイディプス化は三角形化である。「三角形化は、欲望の諸対象を全体人格〔personne globale〕に、欲望を一つの特定の〔spécifique〕主体に、結びつける<sup>7</sup>」。つまりそれらは人格化である。オイディプス化、三角形化によって「欲望する生産は人格化される<sup>8</sup>」。一次的なものである欲望から社会を経て、また社会からの家族の排除を経て、人格が派生する。オイディプス化、三角形化とは人格化のことである。この著作が求めるのは、はじめの欲望から終わりの人格への理論的道筋を丹念に辿ることだ。

この著作に次の例示がある。乳房（部分対象）が母乳（流れ）を生産し、その母乳を口（部分対象）が切断する。乳房は口と接続するが、そもそも乳房は別の部分対象から接続され、また口も同様に別の部分対象と接続する…<sup>9</sup>部分対象は欲望する機械、つまり欲望であるが、それと同様に、流れもそうである。流れは一見、欲望の他者のように見えるが、そうではない。「欲望は流れを起して、自ら流れ、そして自ら切断する<sup>10</sup>」。また、欲望する機械は、三つの生

産、三つの総合、三つの切断である。生産、登録（登記）、消費という三つの生産、接続〔connexion〕、離接〔disjonction〕、連接〔conjonction〕という三つの総合、さらにまた三つの切断である。第一の生産は、第一の総合に、また第一の切断に、対応するが、第二、第三についても同様だ<sup>11</sup>。第一の生産・接続に対応する第一の切断は流れと採取である。切断の一般的意味に反して、この著作の切断は生産・総合に対応する。このように欲望は様々な観点から規定される。

## 2. 欲望の三つの総合

接続としての欲望は他の欲望（流れ、部分対象）とつながる。「欲望する諸機械は、二項規則あるいは連結的〔associatif〕体制、をもつ二項機械である<sup>12</sup>」。重要なのは欲望が欠如をもたないことだ。欲求〔besoin〕が欠如をもちその欠如の充足を求めるものであるのに対して、欲望はそのようなものではない<sup>13</sup>。それは、生産の生産であり、岡本が指摘したように肯定的なものである。

欲望はしかし単に、単系的に線形状に他の欲望とつながるだけではない。欲望は、器官なき身体上での登録の生産、離接の総合でもある。まず「器官なき身体そのものは、非生産的なものとして、線形状の二項系列の第三の時間〔temps〕において、それが生産されるまさにその場所に実存している<sup>14</sup>」。ただし反生産とされる器官なき身体もまた欲望である点に変わりはない。『千のプラトー』が明言するところによれば「CsO〔器官なき身体〕は欲望である<sup>15</sup>」。この第二の様相で欲望はあらゆる方向に単線的につながるのでなく、器官なき身体上での離接の網の目となる。「〔欲望する〕機械は、〔それら機械と〕同じ数の離接点として、器官なき身体上に引っかかっている。これらの離接点の間には、新しい総合の網全体がはりめぐらされ、そしてこれらの離接点は表面を基盤の目状に区分している<sup>16</sup>」。離接はAあるいはBの排他的離接ではなく、AであれBであれ…の包含的離接である。論理学の包含的離接は、通常のアあるいはB（選言）に、AかつB（連言）も含むが、『アンチ・オイディプス』

の包含的離接はそのようなものではない。包含的離接にはシュレーバーの妄想も含まれる。文字通り「すべてが可能である<sup>17</sup>」。スキゾが一度に消費する普遍的歴史である。歴史のすべての名がそこに登場する。欲望は、世界史を可能にする普遍的歴史であり、集団的ファンタスムである<sup>18</sup>。

欲望は単に普遍的歴史であるだけではない。それは、消費の生産、接続の総合でもある。そこに歴史のすべての名に対して「それは私だ」を反復する主体が登場する。『襞』は単なる出来事としての屈折からの観点化、主体化を記述するが、接続の欲望はそのような主体化に近い<sup>19</sup>。晩年狂気に襲われたニーチェが行ったように、この主体は、歴史のすべての名を、普遍的歴史を、一度に消費する。一般に欲望は主体から客体へ向けられる。この場合、主体、客体のほうが欲望に先行する。『アンチ・オイディプス』の欲望は、主体から客体へ向けられるものではない。既にある主体に欲望が生起するのではない。主体は単にその三つ目の総合において残り物として生産されるだけだ。自己同一的な主体、固定的な主体ではない。資本主義社会からの家族の離脱の後に生じる人格でもない。また主体は、歴史のすべての名を通り過ぎるが、包含的離接に備わる差異が消失することはない。歴史のすべての名を所有する弁証法的主体ではない（AかつBではなく、あくまでAあるいはB）。ヘーゲルの弁証法からの差別化は彼らにとって重要だ。

また欲望の三つの総合はこの順序で継起するものに見えるが、そうではない。それらは共存である。第一の切断の流れからの採取はすでに、第二の切断の離脱を前提にしている。「流れからの採取は、連鎖からの離脱を前提としている。生産の部分対象は、すべての総合の共存・相互作用における、登録のストックあるいは煉瓦、を前提とする。流れに情報を与えに来るコードにおける断片的な離脱がなかったら、いかにして流れに対する部分的な採取が存在するであろうか<sup>20</sup>」。欲望の三つの総合は『千のプラトー』で示されるアイオーン、出来事に相当する。欲望の時間は、過去から未来に向かう時間の矢である現在の時間ではない。過去と未来の共存としての出来事の時間である。それは存立平面（内在平面）である。あるいは『差異と反復』の術語でいえば存在の一義性で

ある<sup>21</sup>。

欲望は哲学の伝統において「良きものと判断された対象への意識的傾向」とされた<sup>22</sup>。『アンチ・オイディプス』の欲望は意識的なものではない。精神分析の用法に従い、無意識に属する。ただし、既にある人格に帰属する無意識ではない。欲望は無意識の自動生産である。「実在的なものは欲望——無意識の自動生産〔auto-production〕としての欲望——の受動的総合の結果である。欲望は何ものをも欠如していない。欲望自身の対象をも欠如していない<sup>23</sup>」。人格のほうが後続する。また、対象に向けられるにせよ、その対象というのは他の欲望であり、欲望の他者ではない。「良きものと判断」するような判断は彼らの欲望に関わりえない。彼らの欲望は古典的道德説（例えばアリストテレスのそれ）に帰結する欲望概念から隔絶している。そこにはその都度その観点からのスキゾの狂気がある。欲望は他の欲望とつながる点において「対象への傾向」と言えるかもしれない。ただしそれだけではない。離接的網の目（普遍的歴史）が、それを生きる主体が、生ずる。彼らの欲望はいわば、その都度の普遍的歴史を生きる主体への傾向である。

### 3. 欲望の社会への備給

このようにこの著作の欲望の規定は複雑だ。欲望はまず他の欲望を対象とする。欠如なき欲望は欲望の他者を対象としないように思われるが、これは正しいのか。ところで欲望は社会に相関的だ。欲望と社会のパラドクサルな関係が『アンチ・オイディプス』の主要なテーマを構成する。

欲望と社会との関係に関して第一に次の点を確認できる。欲望は社会に直接備給される。「私達が語っていることは、[A] 社会野が直接的に欲望によって遍歴されていること、[B] この社会野が、欲望の歴史的に規定された生産物であること、したがって、[C] リビドーは、生産力と生産関係とを備給するためには、いかなる媒介も、いかなる昇華も、いかなる心理的操作も、いかなる変容をも、必要としないということ、だけである<sup>24</sup>」。精神分析の備給は

「一定量の心的エネルギーを何かに向けて充当すること」である<sup>25</sup>。精神分析は欲望が家庭的備給から始まることを前提にする。そもそも欲望（欲動，リビドー）は無意識とはいえ特定の人格（私）への帰属が前提にされている。特定の人格の無意識に属する欲望は，人格——その人格本人（私）であれ他の人格であれ，本物であれ幻想であれ——か，部分対象——本物であれ幻想であれ——か，に向けられるとはいえ，家庭的備給にとどまる。オイディプス・コンプレックスではその人格の家族に属する特定の人格（パパ，ママ）に備給される。それは幼児であれ性的欲望である。社会に備給されるのは様々な変容を経た後にすぎない。社会的備給は家庭的備給の代わりにすぎない（成人の愛は幼児の満たされぬ愛の埋め合わせにすぎない）。一方で，『アンチ・オイディプス』によれば，欲望は社会に直接備給される。資本主義機械にいたり，家族の社会からの排除の後，一対一化，適用〔application〕がなされてはじめて人格への備給が起こるにすぎない。正確には備給は単に社会的なものにすぎず，社会の家族への適用によって私的人格（イメージ）が形成されるだけだ。また，社会へ備給されるだけでなくそれはそもそも集合的なもの，集団的ファンタスムである。特定の一人の人格に帰属するところではない。「すべての備給は集合的であり，すべてのファンタスムは集団的であり，この意味で実在の定立だ<sup>26</sup>」。

社会的備給は社会に帰属する特定の人格への備給ではない。社会体〔socius〕という形相——大地の身体，専制君主の身体，貨幣-資本の身体——への備給である。社会的備給には二種類ある（あるいは社会的備給には二つの極がある）。隷属集団の備給と主体集団の備給。人種隔離的備給とノマド的備給。ファシズム的パラノイア的備給と革命的分裂症的備給。つまり，欲望がファシズムに備給されるとは，ファシズムが欲望されるということだ。ライヒの次の叫びにドゥルーズとガタリは賛同する。「いや，大衆は騙されたのではない。大衆はファシズムを欲望した〔désirer〕。説明しなければならないのは以上のことだ<sup>27</sup>」。それに対して，欲望が革命に備給されるとは，革命が欲望されるということだ。「革命家たちがしばしば忘れること，あるいは認めようとしな

いことは、ひとが、革命を欲し、また革命を行うのは、欲望によってであり、義務によってではないということだ<sup>28</sup>」。

#### 4. 欲望の社会による抑制

欲望と社会の関係について第二に確認するなら以下の通りだ。社会は欲望を抑制する。「この研究の始めから、私達は次の二つのことを同時に主張している。一つは、社会的生産と欲望する生産とは、一体をなすが、体制を異にし、したがって、生産の社会的形相は、欲望する生産に対して本質的な抑制を行使すること。いま一つはこれと並んで、欲望する生産（「真の」欲望）が、潜在的に社会的形相を爆破するものをもつこと<sup>29</sup>」。精神分析によれば、家族における抑圧のほうが社会における抑制よりも一次的である。『アンチ・オイディプス』はこの図式を転倒させる。精神分析の抑圧は「ある欲動と結びついた観念や記憶を意識から排除して無意識の中へ押しもどしたり、閉じ込めようとする心の働き」である<sup>30</sup>。一方で抑制は「中身が不快を与える観念あるいはアフェクトを意識的に取り除くことを目指す心的働き」である<sup>31</sup>。抑圧が無意識的働きであるのに対して、抑制は意識的働きである。また、抑圧が家庭的備給に関わるのに対して、抑制が社会的備給に関わる。精神分析によれば、欲望は家族的備給から始まり、社会的備給に代わる。一方で『アンチ・オイディプス』はこれを転倒させる。社会的備給は、資本主義機械の生産以降によりやく家庭的備給になる。正確には備給は社会的なものである。精神分析では抑圧のほうが抑制に権利的に先行する。一方で、ライヒに続きドゥルーズとガタリはこれを逆転させる。「ライヒの力は、いかに抑圧が抑制に依存していたのか、を示したことである。このことは、何らこの二つの概念〔抑圧と抑制〕の混同を含んでいない。なぜなら、抑制は、従順な主体＝臣下〔sujet〕を形成するためには、かつ、社会形成体をこの抑制的構造をも含めて再生産することを保証するためには、まさしく抑圧を必要とするからである。しかし、社会的抑制は、文明〔資本主義社会〕と外延をともしする家庭的抑圧から理解されるべき

ものではない。この家庭的な抑圧の方が、所与の社会的生産という形相に内属する抑制との関係において、理解さるべきものである<sup>32</sup>」。

『アンチ・オイディプス』では抑制のほうが抑圧に権利的に先行する。しかし上記引用で述べられているように、抑制は抑圧を必要とし、手段として用いる。家族の発生以前に、最初の社会から抑圧は既に行われている。第三章は欲望の社会への移行を記述する。未開、野蛮、文明、つまり未開社会、専制君主社会、資本主義社会、という三つの社会機械がこの順序で展開する。第三章は社会の展開も記述する。

領土的表象、つまり未開社会の表象、の三つの審級が示される。第一の審級は抑圧される表象者〔représentant〕であり、それは強度的胚種の内流〔influx〕である。第二の審級は抑圧する表象〔représentation〕であり、それは縁組である。第三の審級は置き換えられた被表象者〔représenté〕であり、それはオイディプスである。第一の審級は欲望（正確にはコード化されえない欲望）である。これが、第二の審級である縁組によって抑圧される。第三の審級であるオイディプスは、抑圧されるものではない。欲望には存在していないものだ。オイディプス・コンプレックスは欲望に含まれない。存在しないにもかかわらず、抑圧する表象（縁組）によって、畏の働きをするイマージュとして、欲望に置き換えられる<sup>33</sup>。この領土的表象の三つの審級は、専制君主社会の表象を経て、資本主義社会の表象において完成する<sup>34</sup>。

## 5. 欲望としての社会

社会は欲望の他者に見える。しかしそうではない。欲望と社会の関係について第三に以下を確認する。社会は欲望である。正確には、社会は、「規定された諸条件における」欲望である。「社会的生産は、規定された諸条件における欲望する生産そのものである。これらの規定された諸条件とは、社会体あるいは充実身体としての群集性〔grégarité〕の諸形相である。分子的形成体は、これらの諸形相の下で、モルの集合を構成する<sup>35</sup>」。規定された諸条件とは、

社会体の形相のことだ。つまり大地の身体，専制君主の身体，貨幣-資本の身体のことだ。

欲望と生産は通常，排他的に区別される。内なる欲望は外なる生産に向けられる。『アンチ・オイディプス』はこのような平行説を退ける。欲望こそが生産である。二元論的解決はドゥルーズとガタリとが決然と退けるものだ。欲望にその他者があるなら，欲望は欠如をもち，欠如を充足するものがその他者となる。彼らは欠如としての欲望を退ける。カントの獲得としての欲望概念を評価するが，彼らからすればそれもまた不十分である。カントの欲望概念はいまだ主観的にとどまる。彼らにとって，真の意味での欲望は客観的，実在的でないといけない。欲望こそが生産である。欲望一元論が宣言されている<sup>36</sup>。

欲望は社会に抑制されるが，欲望を抑制する社会は欲望自体である。自由であるはずの欲望は自ら自らを隷属させる。欲望は自由かつ隷属である。岡本が正しくも捉えた問いは『アンチ・オイディプス』の問いである。そしてこの著作はこの問いに対する解答を提示する。この著作が試みるのは，欲望からのオイディプス化，三角形化，人格化を記述することだ。

## 6. 欲望から社会へ，社会から人格へ

欲望は三つの総合であった。三つの総合が内在的に使用されている限り，欲望は欲望のままである。超越的に使用されるに至ると，欲望は社会化どころか，人格化される<sup>37</sup>。たとえば第一の総合である接続は，内在的使用では部分的・非特定的使用にとどまる。超越的使用になると，オイディプス的・全体的・特定的使用になる。内在的使用から超越的使用への変化は，第一の誤謬推理である外挿〔extrapolation〕が関与している<sup>38</sup>。三つの総合であるという点で変化はない。欲望から人格へ，自由から隷属へと変わったのは，三つの総合そのものではない。それらの使用にすぎない。「しかし「真の」欲望とは何であるのか。なぜなら抑制もまた欲望されるものであるからだ。真の欲望と抑制とはいかにして区別すべきなのか。私達は，極めてゆっくりと分析する権利を要求し

たい。というのも——間違えないようにしよう——[三つの]総合は、対立する[二つの]使用においてさえも、同じであるからだ<sup>39</sup>。内在的使用から超越的使用へと変化するが、本性は変わらない。二元論的対立は、二つの使用に由来する。欲望から社会、家族、人格が派生する。自由から隷属が派生する。ドゥルーズ哲学の構図でいえば、内在から超越が、存在の一義性から存在の類比が、派生する。『アンチ・オイディプス』第一章は欲望を扱う。第二章・第三章は欲望からのオイディプス化、三角形化、人格化である。第二章はこの人格化の形相的原因を提示する。それはつまり、三つの総合について内在的使用から超越的使用への移行を記述する。形相的原因であるのは社会における移行を記述しえていないからだ。形相的原因は、超越的使用、誤謬推理である。第二章・第七節冒頭は、第二章と第三章のそれぞれの主題を簡潔に表現する。「私達は、オイディプス的三角形の、形相、再生産、（形相的）原因、手法、条件を分析しようと試みた。しかし、私達は、この三角形化が依存する実在的諸力、実在的諸原因、の分析を後回しにしてきた。これに対する解答の一般的方向は、単純であり、ライヒによって素描されてきた。つまり、その一般的方向は、社会的抑制、社会的抑制の諸力である<sup>40</sup>」。人格化の形相的原因を扱う第二章に対して、その実在的原因は普遍的歴史が記述される第三章が扱う。

第三章では未開、野蛮、文明、つまり未開社会、専制君主社会、資本主義社会、という三つの社会機械がこの順序で展開する。一見するとマルクス主義の史的唯物論をやり直すかのような世界史がここで示される。第三章はこのような展開だけではなく欲望の社会への移行を記述する。第三章・第三節「オイディプス問題」はこの移行を取り扱う。レヴィ＝ストロースは、近親相姦の禁制を、自分の所属しない集団の成員との婚姻、つまり外婚制、によって説明した。ドゥルーズとガタリはレヴィ＝ストロースのこの見解を批判する。この見解では出自が前提にされていて婚姻は出自から説明される。二人によれば、説明すべきは出自から婚姻（縁祖）ではない。「問題は、エネルギー的強度的秩序から外延的体系に移行することにある。外延的体系は、質的な縁組と、拡がりをもつ出自とを同時に含む<sup>41</sup>」。エネルギー的強度的秩序とは要は欲望であ

る。外延的体系は領土機械（未開社会）の表象である。欲望のすべてが社会に移行するわけではない。移行するもの、ブロックされないものと、移行しないもの、ブロックされるものがある。「しかし、なぜ、インプレックス [implexe], すなわち胚種的内流 [influx germinal], は、抑圧されるのか——それは、欲望の領土的表象者であるにもかかわらず——。それは、…このインプレックスが表象者の資格において差し向けているものが、コード化されえない流れ、コード化されるがままにならない流れであるからだ。つまり、まさに原始社会体の恐怖であるからだ<sup>42</sup>」。インプレックス、胚珠的内流も要は欲望である。欲望は抑圧される。コード化されえない欲望が抑圧される。コード化されうる欲望は社会へ移行する。社会は欲望をコード化する。コード化しえないものは抑圧される。

また第四章は、精神分析に代えて彼らの実践論であるスキゾ分析を提示する。それにあたり、彼らは、第三章までの議論を拡張する。主に欲望から社会への移行が記述されていたが、それは、分子的多様性からモルの集合への移行として拡張される。分子的多様性は欲望する機械であり、モルの集合は社会的機械、有機的機械、技術的機械（いわゆる機械）である。ここで移行は、選別として、つまり分子的多様性の群集性（モルの集合）への選別として、提示される。「群集性は、決して任意なものではない。それは、以下の形容された形相に差し向ける。これらの形相は、創造的な選別によって、群集性を生産する。順序は、群集性 → 選別ではない。そうではなくて、逆に、分子的多様性 → 選別を行使する群集性の諸形相 → この選別から派生するモルのあるいは群集的諸集合 [ensemble molaire ou grégaire] である<sup>43</sup>」。群集性の諸形相は社会でいえば社会体の形相である。つまり欲望 → 社会体の形相（大地の身体、専制君主の身体、貨幣-資本の身体） → 社会機械。引用より、社会体の形相が欲望に選別を行使することが分かる。大地の欲望に対する選別の後に、大地上で未開社会（社会機械）が生ずる。

このように、社会への移行が行われるのは、欲望における対立的契機によって、弁証法的止揚によって、ではない。コード化しうる欲望とコード化しえな

い欲望という差異はあるにせよ、二つの欲望の対立によって社会が生ずるのではない。選別についても同様だ。

以上の移行は、欲望の社会体の形相への備給に対応する。一方の、社会に移行する欲望と、他方の、社会に移行しない欲望。移行する欲望は、ファシズム的パラノイアの備給に相当する。移行しない欲望は、革命的分裂症的備給に相当する。選別についても同様だ。

『アンチ・オイディプス』における欲望と社会との関係は複雑だ。確かに欲望から未開へ、未開から野蛮へ、野蛮から文明へという順序で社会は展開する。欲望がなければ社会はない。社会は欲望である。欲望は社会の始まりからある。しかしそれだけではなく、欲望は、社会の終わりに、つまり資本主義社会の終わりに、ある。欲望は社会の始まりにあるとともに、社会の終わりにある。このパラドクサルな関係は、社会体の二つの意味にも関わる。狭義の社会体は、未開、野蛮という前資本主義社会の社会体である。広義の社会体は、未開、野蛮、文明のすべての社会体のことだ。コード化の前資本主義社会から、公理系化の資本主義社会へ向かうには、脱コード化が必要となる。本性の同一性が言われるのは、欲望と社会とについてもそうであるが、より正しくは、スキゾ（欲望）と資本主義社会とについてだ。欲望は脱コード化にこそある<sup>44</sup>。

## 7. 隷属の由来

確かに欲望からの社会化、人格化が規定路線であるなら、『アンチ・オイディプス』はこの道筋を記述していると言えるかもしれない。創造の事後の観点にたつなら、完全性において優れる神による世界の創造は不思議ではない。しかし、そもそも自由であるはずの欲望はなぜわざわざ隷属にならなければならないのか、と問うことができるだろう。神そのものに照準を合わせるなら、完全であるはずの神がなぜあえて世界を創造するのかと訝しむのももっともだ。

そもそもオイディプス化において帰結するものはすべて欲望の中にあったのか。社会は欲望であった。しかしながら社会で生ずるすべてが欲望に含まれる

わけではない。上述したように、オイディプス・コンプレックスは欲望されたものではない。原始社会において抑圧されたのは欲望であった。オイディプス・コンプレックスではない。欲望は抑圧された表象者である。オイディプス・コンプレックスは置き換えられた被表象者にすぎない。つまり欲望として誤認されたものにすぎない。人格の誕生とともに、オイディプス・コンプレックスは欲望の表象者の地位を占めることになる<sup>45</sup>。しかし欲望にそもそも存在したわけではない。

人格も同様だ。乳房は典型的な部分対象であった。乳幼児（あるいは口）にとって、母乳（あるいは乳）をだす乳房は母を表すものではない。「部分対象が全体人格から採取されるのはみかけの上のことではしかなく、これらの部分対象が実在的に生産されるのは、流れあるいは非人格的ヒュレ、からの採取によって、である。これらの部分対象は、他の部分対象と接続し合うことによって、非人格的ヒュレと、コミュニケーションを行う。無意識は人格を知らない<sup>46</sup>」。欲望として存在するのは部分対象である。欲望において登場するのは生産・反生産の動作主〔agent〕であるが、それら動作主は人格ではない<sup>47</sup>。全体人格、つまり人格は欲望ではない。

第二の社会機械である専制君主社会（野蛮）で構造が、第三の社会機械である資本主義社会（文明）で人格が、派生する。人格はイマージュからなる。ラカンを援用するなら、野蛮は象徴界、文明は想像界、にほぼ対応することになる。第一の社会機械である未開社会に構造、人格は存在しなかった。無論、構造、人格——人格は前述した通り——は欲望にも存在しない。「スキゾ分析の無意識は、人格、集合、そして法を、つまり、イマージュ、構造、そして象徴を、全く知らない<sup>48</sup>」。社会において派生するものがすべて欲望であったわけではない。欲望はスキゾの狂気であるが、精神分析が真の欲望とみなすオイディプス・コンプレックスは欲望ではない。構造も人格も欲望ではない。さらに、欲望は、目的・目標・意図をもたない。これらは、欲望が欠如と溶接することで生ずる。目的・目標・意図は、共同のあるいは人格的なものだ<sup>49</sup>。欲望は精神分析の家族主義を免れている。欲望はドゥルーズ・ガタリ風に純粹無垢

化されている。欲望はスキゾのように善良だ。

人格、オイディプス・コンプレックスなど最後に派生するもの自体、欲望にあったわけではない。それでは欲望はなぜ隷属への道のりの第一歩を踏み出すに至ったのか。社会化、人格化は何に由来するのか。第二章は社会化、人格化の形相的原因を求めた。それは超越的使用と誤謬推理であった。端的には誤謬推理こそが内在的使用から超越的使用への移行を引き起こすとひとまず言うことができる。「欲望する生産との関係で、この不当なオイディプス的使用〔超越的使用〕は〔中略〕常に、同じ誤りの周囲を旋回するように、かつ理論的・実践的誤謬推理を包含するように私達に思われた」。しかしながら、議論の詳細に立ち入るとそれほど簡単には見えない。複数の誤謬推理が相互にいかなる関係をもつかも含めて、誤謬推理そのものが何に由来するかは明言されていない<sup>50</sup>。第四章は、欲望から社会・人格への変容を、分子的多様体からモルの集合への統計学的変容として捉え直す。上述したように、分子的多様体には目的・目標・意図はないが、モルの集合にはある。つまり分子的多様体は、目的などがなく、つまり偶然の諸要素である。一方でモルの集合はそうではない。この統計学的変容あるいは集積自体は偶然なのか、そうではないのか。「統計学的な集積は、偶然の結果、偶然にでてきた結果、であると考えてはならない。逆に、それは、偶然の諸要素に対して働いている選別の成果である」。この選別、つまりこの選別的圧力のほうが、モルの集合自体に先行する。言い換えれば、モルの集合は「特異性を破壊し、消滅させ、あるいは調整する選別的圧力」から生まれる。上述したように、群集性の形相のほうが、群集性（モルの集合）に先行する<sup>51</sup>。ここでは選別的圧力が偶然によるものではないことが示される。しかしそもそも選別的圧力が何に由来するのかは述べられていない。『アンチ・オイディプス』は、そもそもなぜ隷属かという問いに対する答えを提示しているわけではない<sup>52</sup>。岡本の不満は根拠を完全に欠いているわけではない。

## 8. 『千のプラトー』：隷属の充足理由

『千のプラトー』は『アンチ・オイディプス』の第四章の議論を拡張的に整備する。有機的機械は無機物とともに地層として一般化される。社会的機械は、あたかも地層に基づくかのように、アジャンスマン〔agencement〕とされる。つまり、一見すると、自然（地層）から文化（アジャンスマン）への進化的秩序が導入されているかに見えるが、決してそうではない。それとともに、アジャンスマンは、欲望である器官なき身体上にも定位される。欲望からの社会と有機体との並行的流出という『アンチ・オイディプス』の理論的アグレッシブさが放棄されるわけではない。すべては抽象機械から派生する。抽象機械は『アンチ・オイディプス』の欲望を発展的に継承するものだ（欲望よりも一次的なものとも言うことができる）。器官なき身体、存立平面は、抽象機械と外延を同じくする。大きな図式で言えば、『アンチ・オイディプス』における欲望からの社会化、人格化は、『千のプラトー』における抽象機械からの地層化、主体化へと継承される<sup>53</sup>。

結論のプラトーは抽象機械の類型論的分析に触れている。抽象機械は存立平面、器官なき身体であり、『千のプラトー』の哲学における一次的なものを構成する。『アンチ・オイディプス』の欲望は、器官なき身体とアジャンスマンとに定位される。最も優れた意味での抽象機械こそが、抽象機械という存立平面（器官なき身体）を、また地層、アジャンスマンをつくりだす。彼らの哲学は一元論のままである。ただし、抽象機械には三つのタイプがある。「[1] 存立性の抽象機械 —— 特異でかつ突然変異的であり、多様化された連結をもっている —— 。[2] それらだけではなく、地層化の抽象機械 —— 存立平面を別の平面〔組織と展開の平面〕によって包囲している —— 。[3] そして、超コード化あるいは公理的な抽象機械 —— 全体化、同質化、閉鎖の接合〔連接〕〔totalisation, homogénéisation, conjonction de fermeture〕を行う —— <sup>54</sup>」。存立性の抽象機械は、存立平面に関わる抽象機械である。また、領土性（地層性）に囚われたアジャンスマンを別のアジャンスマンに開くものだ。つまりその脱

領土化の側面に関わる。これ以外に、二つの抽象機械の類型も認められている。地層化の抽象機械は、存立平面からの地層化に関わる。超コード的あるいは公理的抽象機械は、アジャンスマンの再領土化に関わる。シニフィアンの体制（超コード化）、ポスト・シニフィアンの体制（公理）をつくりだす。地層化は、『アンチ・オイディプス』で言えば、おおよそ、欲望からの有機体化、未開化（三つの社会機械のうち最初の社会機械のみ）に相当するだろう。超コード化は野蛮化（専制君主機械）に、公理化は文明化（資本主義機械）に、相当するだろう。いずれにせよ『アンチ・オイディプス』はこの点で曖昧であった。欲望に隷属の理由を認めるまではしていない。『千のプラトー』はこのように抽象機械にいわば充足理由を認めさえしている。充足理由律は矛盾律とともにライプニッツ哲学の二大原理を構成するが、ドゥルーズは充足理由という概念を自らの哲学に取り込む<sup>55</sup>。『千のプラトー』の結論から翻って考えるなら、スキゾの自由は内なる隷属への傾斜によって汚されていた。むしろ、その傾斜によってスキゾの自由はいや増しに自由である。

## 9. 「欲望と快楽」：欲望の一次性

彼らの哲学についての岡本の直観は正しいと言うこともできよう。彼らの哲学において賭けられているのは、一元論と二元論との関係をいかに調整するかということだ。ただし一元論は二元論に権利的に先行し、逆ではない。そしてドゥルーズとガタリは一元論に基づきながらも、どこかで二元論的対立を巧妙に導入せざるを得ない。しかし彼らは恐らくそれを無自覚に行っていたはずはない。

1977年にドゥルーズは、『性の歴史』（1976年）刊行後のフーコーに向けた自らの覚え書を、フランソワ・エヴァルドを介してフーコーに渡した。この覚え書は、エヴァルドの前書きとともに『マガジン・リテレール』において「欲望と快楽」として1994年に公開され、後に『狂人の二つの体制』に再掲される<sup>56</sup>。このテキストにおいてドゥルーズは、この時期理論的危機を迎えていたフーコー

へ配慮もしながら、ただし決定的な仕方でもフーコーの権力装置概念の問題点を示す。フーコーの理論との対比で彼らの欲望の理論的有効性が示される。フーコーの権力装置に対抗しうるものは、それに二次的なものにすぎない抵抗現象しかない。一方で、ドゥルーズとガタリの場合、まず欲望がある。逃走線、脱領土化の運動は欲望の異名である。「逃走線、脱領土化の運動は、ミシェル [フーコー] においてそれらに該当するもの —— 歴史的集団的決定としての —— をもたないように私には思われる。私にとって、抵抗現象のステータスという問題は存在しない。逃走線が第一の決定である以上、欲望が社会野に配置を与え作動させている以上、むしろ権力装置こそが、これらのアジャンスマンによって生産されながらも同時に、これらのアジャンスマンを押しつぶすか、あるいはふさぎ止める<sup>57</sup>」。フーコーの権力装置は彼らの欲望の一部に相当するにすぎない。「権力装置はアジャンスマンの一つの構成要素にすぎないだろう<sup>58</sup>」。フーコーの場合、固定的なものである権力装置を一次的なものとする以上、そこからの歴史的变化を説明するのが難しい。一方で、ドゥルーズとガタリの場合、生成を事とする欲望を一次的なものとする以上、それを説明することができる。自由の中に既に隷属があったがゆえに、隷属は生じたが、また同時に、隷属の中に自由がある。隷属は革命、解放へと開かれている。

このテキストでドゥルーズは彼らの欲望をフーコーの快樂に対比させる。欲望が彼らの哲学にとって本質的な概念であることが再確認される。以上のような論点以外にも、このテキストにはさらに本稿の議論に関連するものがある。「社会野は社会野自らの諸矛盾によって規定されていない」。あるいは「社会は、社会野は、自らと矛盾しない<sup>59</sup>」。社会はその矛盾によって変革される —— これはヘーゲル・マルクスの弁証法の論理である（止揚、階級闘争、上部構造と下部構造との齟齬など） —— ものではないという彼らの考えが明確に示されている。フーコーの、権力（その抵抗とともに）、戦略といった概念にドゥルーズが弁証法の影を見ていたのは明らかだ。ドゥルーズとガタリも抑制という一見矛盾を連想させる概念を放棄するわけではない。ただし「私は抑制というある種の概念を必要とする。それは、抑制が自発性に向けられるという意味

での抑制ではない。集団的アジェンスマンが多くの次元をもち、かつ、権力装置がその一つの次元でしかないという意味での抑制である<sup>60</sup>」。一次的な欲望が、パラノイア的保守的備給とスキゾ的革命的備給とをもつことは問題がない。この場合でいえば、パラノイア的保守的備給のほうが権力装置に相当する。このように一見二元論的対立に見えるものも、ドゥルーズによって理論的に正当化されている。ドゥルーズは自らの哲学を自覚的に展開する。

## おわりに

『アンチ・オイディプス』によれば、欲望は本来革命的である。その一方で欲望は隷属に至る。岡本はここに欲望のパラドックスをみる。本来革命的であるはずの欲望がその隷属に至るのはなぜか。このパラドックスをこの著作は説明しえていないのではないかと岡本は示唆する。この岡本が正しく捉えている問いは『アンチ・オイディプス』の問いである。『アンチ・オイディプス』はその問いに対する解答の試みである。欲望から社会へ、社会から人格へという道筋が丹念にたどられる。第一章は非常にオリジナルな欲望概念を提示する。それは同時に、三つの総合、三つの生産、三つの切断である。普遍的歴史（離接）のみならず、普遍的歴史を一度に消費する主体（連接）を生産することになる欲望である。第二章では欲望からの社会経由の人格化が記述される。三つの総合が内在的に使用される限り欲望は欲望のままである。五つの誤謬推理によって内在的使用から超越的使用への移行が生ずる。三つの総合が超越的に使用されると欲望は社会、人格になる。人格化によっても三つの総合（つまり欲望）自体は変わらない。内在的使用から超越的使用に変わっただけである。以上で人格化の形相的原因が示される。第三章は、世界史、つまり社会の歴史において欲望からの人格化を記述する。社会機械は原始社会、専制君主社会、資本主義社会へと展開する。資本主義社会において、社会からの家族の排除、社会の家族への適用が生じ、はじめて人格が生ずる。以上で人格化の実在的原因が示される。

『アンチ・オイディプス』で確かに欲望から人格の道筋は描かれた。しかしながら、人格、オイディプス・コンプレックスなど最後に登場するものは、欲望そのものには含まれていない。それならば、欲望にいわば「最初の一撃」を与えたものは何か。超越的使用、誤謬推理が何に由来するかは明言されない。分子的多様体からモルの集合を選別する選別的圧力（群集性の形相）は単に偶然的なものではないが、それが何に由来するかは明言されない。隷属が何に由来するかは明言されない。二人の共同作業の集大成となる『千のプラトー』（1980年）は、欲望を発展的に継承する抽象機械にあっさり隷属の充足理由を認める。そもそも自由には隷属が、その傾向が、含まれていたことになる。

岡本の見解を支えていたその直観は正しい。二人の哲学において賭けられているのは、一元論と二元論をいかに調整するかということだ。一元論こそが二元論に優先しなければならない。その際、彼らは一元論に基づきながらも二元論的対立をどこかで導入せざるをえない。ドゥルーズは「欲望と快楽」から分かるように自らの欲望概念の理論的価値をよく弁えている。欲望から出発するがゆえに、隷属における自由への傾きを説明できる。自由の中に隷属があるがゆえに、隷属は生じるが、また同時に隷属の中に自由がある。

- 1 Jean-Jacques Rousseau, *Du contrat social*, in *Œuvres complètes* III, Gallimard, p. 351.
- 2 Gilles Deleuze, Félix Guattari, *L'Anti-Œdipe*, Minuit, 1972, p. 136. 引用中の [ ] は引用者による補足などである。原語はその訳語の直後の [ ] 内に記す。
- 3 岡本裕一郎、『フランス現代思想史 —— 構造主義からデリダ以降へ —— 』, 中央公論新社, 2015年.
- 4 同書, pp. 134-154. なお, 岡本が言及する「欲望のパラドックス」は『アンチ・オイディプス』で使われるが, それは岡本が言う意味とは異なる。「欲望のパラドックスとは以下のことだ。つまり, この欲望の両極 [ファシズム的パラノイア的極と分裂気質的革命的極] を見きわめるためには, また, 欲望する機械への集団の革命的試みを抽出するためには, 無意識のこのように長い分析が, 無意識の余すことのない分析が, 常に必要であるということだ」。 *L'Anti-Œdipe*, p. 488.
- 5 この点は以下の古典と応用を参照。E・カッシーラー, 『ジャン＝ジャック・ルソー問題』, みすず書房, 1997年, pp. 40-52; Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Minuit,

1967. また日本人研究者による手堅い研究は以下を参照。川合清隆, 『ルソーの啓蒙哲学——自然・社会・神』, 名古屋大学出版会, 2002年, pp. 290-317.
- 6 *L'Anti-Œdipe*, p. 100.
  - 7 *Ibid.*, p. 88.
  - 8 *Ibid.*, p. 64.
  - 9 *Ibid.*, p. 13.
  - 10 *Idem.*
  - 11 『アンチ・オイディプス』の第一章・第一節は生産・接続を, 第二節は登録（登記）・離接を, 第三節は消費・接続を, 扱う。第一章・第五節は三つの切断を扱う。なお, 第一の切断は流れ, 採取, 第二の切断は連鎖あるいはコード, 離脱, 第三の切断は主体, 残り物である。
  - 12 *Ibid.*, p. 13
  - 13 *Ibid.*, p. 35.
  - 14 *Ibid.*, p. 16.
  - 15 Deleuze, Guattari, *Mille plateaux*, Minuit, 1980, p. 203.
  - 16 *L'Anti-Œdipe*, p. 20.
  - 17 *Ibid.*, pp. 37, 66, 361, 372, 396, 458.
  - 18 吉澤, 「『アンチ・オイディプス』の二つの普遍的歴史」, 『桜文論叢』第107巻, 2023年, pp. 1-26.
  - 19 Deleuze, *Le Pli: Leibniz et le baroque*, Minuit, 1988, pp. 27, 30.
  - 20 *L'Anti-Œdipe*, p. 50.
  - 21 *Mille plateaux*, p. 320, etc. Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968, pp. 386-389. 吉澤, 「ドゥルーズにおける出来事——ホワイトヘッドとともに——」, 『津田塾大学』第43号, 2011年, pp. 303-328; 「『アンチ・オイディプス』の二つの普遍的歴史」.
  - 22 « désir [phil. généré] », in *Encyclopédie philosophique universelle, volume II: les notions philosophiques, tome 1*, PUF, 1990, p. 608. 典型的にはアリストテレスであることが項目から分かる。
  - 23 *L'Anti-Œdipe*, p. 36.
  - 24 *Ibid.*, p. 38.
  - 25 『精神分析事典』, 岩崎学術出版社, 2002年, p. 404.
  - 26 *L'Anti-Œdipe*, p. 337.
  - 27 *Ibid.*, p. 310.
  - 28 *Ibid.*, p. 416
  - 29 *Ibid.*, p. 141. 強調論者。
  - 30 『精神分析事典』, p. 477.
  - 31 *Dictionnaire de la psychanalyse*, Fayard, 1997, p. 916.
  - 32 *L'Anti-Œdipe*, p. 143.
  - 33 *Ibid.*, pp. 197-199.

34 *Ibid.*, pp. 258-261, 320-322.

35 *Ibid.*, p. 415.

36 *Ibid.*, pp. 34-35.

37 第二章・第三節は接続を，第四節は離接を，第五節は連接を，扱う。

38 三つの総合の内在的・超越的使用，また五つの誤謬推理が第二章で示される。

三つの総合

接続的総合	内在的使用：部分的かつ非特定的使用
	超越的使用：オイディプスの全体的かつ特定的使用 1) 両親の様相：オイディプスの三角形的形相が対応 2) 婚姻の様相：三角形的形相の再生産が対応
離接的総合	内在的使用：包含的あるいは無制限的使用
	超越的使用：オイディプスの，排他的，制限的使用 1) 想像的極：未分化状態の想像界 2) 象徴的極：排他的な象徴的な差異化
連接的総合	内在的使用：ノマド的多義的使用
	超越的使用：人種隔離的一対一的使用 1) 人種主義的，国家主義的，宗教的等々の契機 2) 家庭的契機

五つの誤謬推理

第一の誤謬推理：外挿
第二の誤謬推理：ダブル・バインド
第三の誤謬推理：適用
第四の誤謬推理：置き換え
第五の誤謬推理：後から

39 *Ibid.*, p. 141. 強調ドゥルーズとガタリ。

40 *Ibid.*, p. 137

41 *Ibid.*, p. 187.

42 *Ibid.*, p. 195.

43 *Ibid.*, p. 414.

44 「『アンチ・オイディプス』の二つの普遍的歴史」，殊に pp. 19-22；吉澤，「『アンチ・オイディプス』の欲望 — 社会と有機体 —」，『桜文論叢』第110巻，2024年，pp. 1-24，殊に pp. 8-14.

45 *L'Anti-Œdipe*, pp. 321-322.

46 *Ibid.*, p. 56.

47 *Ibid.*, pp. 57, 320.

48 *Ibid.*, p. 374.

- 49 *Ibid.*, pp. 413-414.
- 50 *Ibid.*, pp. 133-135.
- 51 *Ibid.*, pp. 413-414.
- 52 ラプジャードも、形而上学的なものから社会的なものへの、自然から歴史への、つまり欲望から社会への、移行を取り上げる。そして「欲望する機械は、充実身体（大地の身体、専制君主の身体、貨幣-資本の身体）を、基礎として生産する。この基礎から出発して、集合的また人格的、利益、目標——この身体の要求に対応する——は配分される」。しかし、ラプジャードはこれを正当化する参照を示していない。ラプジャードはすでに『千のプラトー』の立場から『アンチ・オイディプス』を記述している（その限りで間違いではない）。David Lapoujade, *Deleuze, les mouvements aberrants*, Minuit, 2014, pp. 170-171. シベルタン＝ブランによれば、「すべての社会的生産の様相は、特殊な審級——充実身体として機能する——の形成を、自らの固有の再生産の条件として、引き起こす」。つまり、社会的生産が、社会体としての充実身体を引き起こす。確かに、そのような解釈を可能にする箇所もある（例えば、*L'Anti-Œdipe*, p. 18）。しかしながら、先に確認したように、第四章によれば、社会体による欲望の選別から社会的生産が生ずる。Guillaume Sibertin-Blanc, *Deleuze et L'Anti-Œdipe : La production du désir*, PUF, 2010, pp. 49-50.
- 53 『千のプラトー』については以下を参照。吉澤, 「『千のプラトー』における内在と超越」, 『桜文論叢』第103巻, 2021年, pp. 223-262.
- 54 *Mille plateaux*, pp. 640-641. conjonction は『アンチ・オイディプス』の時とは同じ意味で使われていない。
- 55 例えば *Différence et répétition*, p. 287. 「齟齬, すなわち差異, あるいは強度（〈強度の差異〉）, これらは現象の充足理由であり, 現象するものの条件である」。
- 56 Deleuze, *Deux régimes de fous: textes et entretiens 1975-1995*, Minuit, 2003.
- 57 *Ibid.*, p. 118.
- 58 *Ibid.*, p. 115.
- 59 *Ibid.*, p. 116.
- 60 *Idem.*